

彷徨する詩人

—詩編139編の構造と主題—

飯

謙

The Structure and the Theme of Psalm 139

II Ken

Abstract

In this paper, I have considered the structure and the theme of Psalm 139. At first I have analyzed the text from the viewpoint of metrics, such as alliteration, rhyme, etc. The analysis has suggested that the text is divided into eight units, vv. 1-3, 4-6, 7-9, 10-12, 13-15, 16-18, 19-22, 23-24, and that each two units make up a strophe, vv. 1-6, 7-12, 13-18, 19-24. I have pointed out that the author of the Psalm emphasizes the omnipresence and omniscience of Jhwh, and that these two themes are combined to express *Mitsein* of Jhwh. They have led the author to perceive Jhwh besides the Jersalemer Temple. In this way, the Psalm 139 has manifested the de-temple ideology.

キーワード：旧約詩編の編集史、旧約詩編の配列、詩編139編、脱神殿、神の全知と遍在

Key words: redaction of the Psalter, contextual reading of the Psalter, Ps. 139, de-Temple-Ideology, omnipresence and omniscience of God

〇. はじめに

われわれは先の論稿において、旧約詩編最後の「ダビデ詩編集」巻頭の作品である詩編138編の構成と主題とを論じた¹。そこで明らかにされたのは、この作品が構造の点で1-5節と6-8節との二段落に分割されること、双方の段落は構造の中心をなす主題が「作者の体験したヤハウエの業」で共通していると読めるものの、行数や語彙など可視的な重なりは少ないこと、そしてヤハウエを認識する場が前半ではエルサレム神殿であるが後半ではエルサレム神殿以外の場へと移行していることである。この最後の点はいへん興味深い。すなわち、1-5節ではエルサレム神殿を舞台とし（2節）、ヤハウエが彼を讃美する者に応答すること（3節）、また敵対する「地の王たち」がヤハウエを讃美する者へと変えられることが念じられている（4-5節）。このように詩編138編の前半には、①エルサレムへの憧憬と崇敬の思い、すなわちエルサレム中心主義、②その「道」（戒め）に歩む者に対するヤハウエからの祝福、すなわち律法中心主義的な応報思想、そして③敵対者を同化させんとするユダヤ民族中心主義的な感情が観察される。われわれの見るところ、これらの言表が依拠するのは「神殿の神学」である。それに対して、6-8節では、ヤハウエがエルサレムではない「遠くから」（6節）、律法を破ったと思われる「低き者」や「傲る者」、また「苦難の中」にある者にも「敵の怒りを越えて」働きかけ（6-7節）、「彼の手業」を放置しない（8節）と、その神学を覆す言辞が展開されていた。われわれはここに旧約詩編の文脈が「脱神殿」へと移行する、分岐点を見たのである。

われわれは、旧約詩編が単なる古代イスラエルの宗教詩を無意図的に並べた歌集ではなく、連作として読まれるよう推敲を重ねた編集体であることを示してきた。そして、第1ダビデ詩編を例として、この連作が、エルサレム神殿に依拠することなく成立する信仰、すなわち「脱神殿」とでも呼ばれるべき、精神的地平を指し示していることを明らかにしたのである²。われわれはさらに、この図式を第1ダビデ詩編以外のテキストに適用すべく、旧約詩編を締めくくるマアロート歌集以降の作品群に着目した³。われわれが諸家⁴から学びつつ讀んだところ、マアロート歌集（詩120-134編）は、編集史的には、巡礼者の詩に職業的な詩人が補筆し、成立した作品群であった。その中で、エルサレム神殿に対する思慕の念は一貫していたが、応報思想や異教的要素、あるいは敵対者に対する緩やかな感情は鋭く矯正されていた。その流れはマアロート詩編に続く三つの無表題作品（詩135-137編）でいっそう補強され、エルサレム中心主義、応報思想、そして異民族に距離を置く民族主義が前面に押し出されていた。それゆえ、われわれは詩編138編に、旧約詩編の文脈の転換点を読み取ったのである。

では旧約詩編最後の「ダビデ詩編」冒頭に観察されたこの転換は、その後に続くこの詩集の主要な旋律となっているのであろうか。その確認が本論文の課題である。以下において、詩編138編から抽出された主題が、続く139編にどのように展開されているかを検証し、旧約詩編を締めくくる作品群のメッセージを考察する手がかりを得たい⁵。

1. 詩編139編 — 試訳

1. 指揮者に。ダビデに。伴奏付。

ヤハウエよ、あなたは私を究めました。

そしてあなたは知っています、

2. あなたが、あなたが知っていたのです、私の座ることも、立つことも。

あなたは識別していました、私の考えを、遠くから。

3. 私の往くことも、倒れることも、あなたはふるい分けていました。

そして私の道のすべてを、あなたは洞見していました。

4. なぜならば、私の舌に何のしるしもないのに、

ああ、ヤハウエよ、あなたは知っていたからです、すべてを。

5. 後ろも、前も、あなたは私を梓づけし、

私に対して、手を、置きました。

6. その知識は、私には、不思議。

それは守られていて、私には測りがたい。

7. どこへと、私は歩もうか、あなたの霊から [離れて]、

どこへと、あなたの顔から [離れて]、私は逃走しようか。

8. もし私が天へと上ろうとも、そこにあなたが。

陰府へと拡げても、見よ、あなたが [そこにいる]。

9. 私は曙の翼をあげようとも、

海の後方に、定住しようとも、

10. そこでさえも、あなたの手は、私を導く、

あなたの右手が、私を捕らえる。

11. 私は言った。本当に、闇が私を包み、

夜が、私のための光を [包んでいる]、と。

12. [だが] 闇さえも、あなたにとっては、闇とはならない。

夜は、昼のように、輝く。

同じ闇のように、同じ光のように。

13. まさに、あなたこそが、私の内臓を作りました。

私の母の胎内で、あなたが私を覆います。

14. 私はあなたを讃えます、私の [上に起こった] 畏るべき不思議のゆえに。

[それは] あなたの業なる不思議です。

私の魂を、実によく、あなたは知っています。

15. 私の骨は、あなたから、かくされていません。
まさに、隠れたところで、私は作られ、
地の下で、私は織り上げられたのです。
16. かたちなき私を、あなたの目は、見ました。
そしてあなたの書に、それらすべては、書かれ、
日々は形づくられたが、その中には何一つなかった。
17. 私には、何と尊いことか、あなたの考えは、エールよ。
何と多いことであろうか、それらの頭〔数〕は。
18. 私はそれらを数え上げるが、それらは砂よりも多い。
私が目覚めたが、なお、あなたは共に〔いる〕（我に返ったが、まだ数え終わらない）。
19. もし不正な者をあなたが殺すならば、エローアよ、
血の人たちは、私から、離れ去れ。
20. 彼らは、企みのために、あなたに語りかけます。
彼らは上げました、空しく、あなたへの敵意を。
21. あなたを憎む者を、ヤハウエよ、私は憎まないでしょうか、
あなたに向かい立つ者たちを、私は嫌忌しないでしょうか。
22. 徹底的に憎んで、私は彼らを憎みます。
彼らの敵のためのことは、私のためのことになります。
23. 私を究めてください、エールよ、知ってください、私の心を、
私を精錬し、知ってください、私の不安を。
24. 見てください、私の内に、痛みの道があるかどうかを、
そして私を導いてください、永遠の道に。

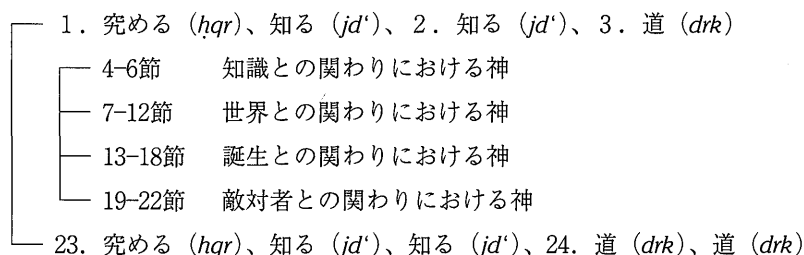
2. 統一性の問題

C. A. & E. G. Briggs はその注解の冒頭で、詩編139編が「合成作品」⁶であることを嘆いている。Briggs をもち出すまでもなく、この詩編は実に難解な作品である。Briggs はその絡まった編み物を解きほぐすため、作品を三つの教訓詩、すなわち、(A) 神の遍在を語る7-12節、(B) 神の全知を語る1-6, 13, 15ab, 16, 23-24節、(C) 神の陣営にある者の貴さと敵対者への攻撃と嫌悪を語る17, 19a, 20a, 21-22節に整理した。その他 (14, 15c, 18, 19b, 20b) は加筆部と見たのである。この分類によれば、(A) は、①7-8節、②9-10節、③11-12節が、それぞれ二つの同義的並行法を構成する三連、(B) は、①1-2節が同義的な四行詩、②3-4節が同義的並行法と統合的並行法、③5-6節と④13, 15節（加筆部を含む）、および⑤16節はおのおの二つの同義的並行法、そして⑥23-24節は同義的並行法と統合的並行法という六連、最後に (C) は、①神の側に立つ者（17節）と敵対する者（19a, 20a）とを対立的に描く二つの同義的並

行法、そして②21-22節が二つの同義的並行法、という二連。このように、Briggs は詩編139編を、形式的に整った詩歌の合成作品として取り扱ったのである。しかしその形式的整合のために、根拠薄弱な加筆部を多数設定せねばならなかった。しかもそれらが挿入された意味、合成された意義については一切論じていない。とはいえ、この作業が詩編139編の含む主題を明示したことは評価されてよいだろう。

独語圏に Briggs の見解を顧みる者はいないが、同じ問題意識からの小さな改変は提案されてきた。F. Hitzig や J. Wellhausen はその代表である。彼らは別の観点から13節と14節 a-b の位置を組み替え、Briggs が加筆部とした14節と15節 c を文脈に組み込んだ。彼らの見るところ、13節で詩人が語る母の胎における被造という主題は、15節と同内容である。そして13節冒頭の理由を述べる接続詞 *kj* は、14節 a のコホルタティヴ (*'wdk*=私は讃えます) に対応する語と解される。そうして彼らはこれを写字生による誤記として、14節 a-b+13節+14節 c-15節と続く詩列を想定復元したのである。これは、B. Duhm や R. Kittel⁷ら主要な注解書に引き継がれ、20世紀前半の定説とも呼べる見解となった。H. Gunkel はこれに加えて、2-3節と4節との組み替えも提案している。Gunkel は、1節 (b) が短すぎるため、独立の並行法が構成されないと考えた⁸。しかし2-3節が相互に類似し、かつ双方が対になっていると見て、4節が1節の後に置かれるべきと提案したのである。だが当然のことながら、この操作を裏づける写本や古代訳は存在しない。われわれはマソラ・テキストを尊重する立場から⁹、これを彼の空想の産物と断じ、退けざるを得ない。

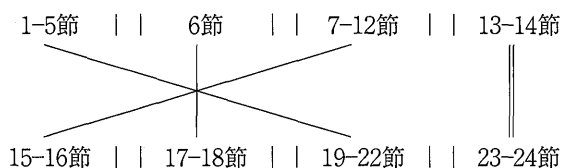
このように詩編139編は、早くから統一性に疑念を呈されてきた。他方、われわれは、各詩編を統一的な完成体として扱うスタンスをとり続けてきた。この点で参考となるのは、C. ストゥールミュラーによる構造分析である。ストゥールミュラーはこの作品について、1-3節と23-24節にインクルージョを観察している。そしてそれに囲まれる本文で、四つの主題が語られるというのである。ストゥールミュラー自身は明示していないが、われわれはその指摘から次のような囲い込みの構造を作成した¹⁰。



ストゥールミュラーは、第4の主題に現れた迫害の中での嘆きが、先行する三つの主題に含まれる「闇」を性格づけると述べている。このおおざっぱな図式が、作品の全体像をある程度説明していることは認めてよいであろう。しかし、20世紀前半にあの歴史批評的な研究が提起した、この作品のもつ構成上の不統一性という問題が解消されたのではない。たとえば、この構造で対応する位置にある1-3節と23-24節の動詞の時制である。1-3節が確立した状態を物

語と思われる完了形である一方、終結部の23-24節は、なお不満足な状態にあるゆえに発せられる命令形である。われわれはこの点に、単なる対応を指摘するだけにとどまらない問題を認識すべきであろう。すなわち、われわれは、20世紀後半に文芸学的方法が拓いた手続きにしたがって、テキスト結合の仕組みをていねいに説明する必要があるのである。

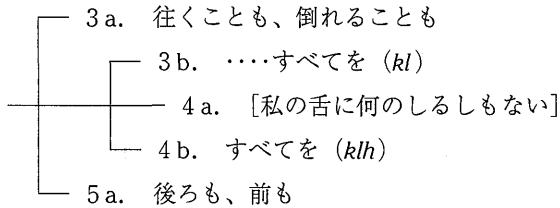
その観点からのアプローチとして注目すべきは P. Auffret の分析である¹¹。彼は、M. Girard を引用しつつ¹²、この作品が、1-14節と15-24節に二分されることを指摘する。その根拠として、彼は双方の終結部となる13-14節と23-24節に、内面に関わる語（内蔵=13節、魂=14節、心=23節）と動詞（知る=14, 23, 24節）の共通をあげる。そして、同様に語彙上の重なりや文体上の類似を手がかりに、1-5節と19-22節、6節と17-18節、7-12節と15-16節が、下に示す通り、交差配列的に対応していると主張した。



彼は、語彙や文体、連辞法など、さまざまな要素をつなぎ合わせ、この構造を完成させている。しかしそれは決して分かりやすいものではない。たとえば1-5節である。彼がこれを一つの段落とする根拠は、このまともに見られる動詞と補語の関係である。彼はその組み合わせの類似性から、2-3節の関連性を指摘し、さらに4-5節がそのヴァリエーションであると見る。そうして、2-3節と4-5節を一つのまともにくくる。まず2節と3節について、彼の分析を検証したい。

2. あなたが知っていた、私の座ることも、立つことも。
あなたは識別していた、私の考えを、遠くから。
3. 私の往くことも、倒れることも、あなたはふり分けていた。
そして私の道のすべてを、あなたは洞見していた。

上の訳文は、ヘブル語の原文を逐語的に邦語に置き換えたものである。下線部は、実線が動詞 (x)、波線が補語 (y) にあたる。2節が $x \rightarrow y$ と動くのに対し、3節は $y \rightarrow x$ という逆の動きになっている。次に4節 b は $x \rightarrow y$ 、5節 a は $y \rightarrow x$ で、2節 b-3節 a と同じ移行を示している。そして Auffret は、4節 a と5節 b とを、それぞれの対応詩行の拡張部と説明する。すなわち、4節 a 「私の舌に何のしるしもない」は4節 b の補語「すべて」、5節 b 「(私に手を)置いた」は5節 a の動詞「杵づける」を言い換えていると述べるのである。このように、彼によるならば、4-5節は逆対応した一つのまともを構成している¹³。しかし Auffret の指摘はこれにとどまらない。彼はさらに、3-5節にも集中構造を見いだす。すなわち、これら三節の補語は、相互に関連し、文字通り互いを補い合う位置にあると主張する¹⁴。



彼が外枠を構成させた対語が一定の指標となることは首肯できる。このような対極表現は、創世記の冒頭にも観察されるのであるが、ヘブライ文学で、全体性を表現する基本的な手法である¹⁵。この手法は詩編139編において頻繁に用いられており、冒頭部分について観察しても、Auffret が取り上げる3節 a と5節 a だけではなく、2節 a にも見られる。にもかかわらず、これが3節 a と5節 a とどのように関わるのか、彼は述べていない。また5節 b はこの構造においてどのように評価されるのであろうか。確かに彼は5節 b を5節 a に付随するものと性格づけた。それは4節 a も同じ扱いであったはずである。したがって、彼が作成した図式は、全体との連関に置くことのできない、部分的なものに過ぎない。

では、このまとまりはどのように読まれるべきであろうか。われわれは、詩編の基本的な執筆手順に立ち返り、一般的には理由を説明する接続詞と解される4節の *kj* の位置づけを考察しておきたい。繰り返すまでもなく、*kj* は、Gunkel が、賛歌においても、嘆きの歌においても、作品劈頭の讃美の促しや救いの訴えに続いて、その根拠にあたる内容を導入する際に用いる語として注意を払っている接続詞である¹⁶。それゆえわれわれは1-3節と4節以下とを区分して取り扱う必要があると考える。そこで、Auffret とは別に、われわれはまず、1-6節を音韻論¹⁷のレベルで分析し、そこに見られる特徴を観察したい。

1. [JHWH] h^oqarttanî wattêdâ'
2. ['attâ] jâda'ttâ šibtî w^eqûmî | | banttâ l^erêî mērâḥôq
3. 'ārḥî w^eribî zērîṭâ | | w^ekol-d^erākaj hiskantâ
4. kî …… bilšônî | | …… kullâḥ
5. …… ṣartânî | | …… kapekâ
6. …… mimmenî | | …… lâḥ

ここからは明らかな音韻論的区分を読み取ることができる。二重下線を付した1節結語末尾の長母音 *â* は、2節 ab の行頭語の末尾、そして3節 ab 結語末尾に移っている。やはり下線を付した1節冒頭の呼びかけ「ヤハウエよ (^odônâj)」に続く単語末尾の長母音 *î* は、同様に、2-3節で末尾に長母音 *â* をもつ語の前後をまぐるしく動く。そして3節 b で消えたと思われる長母音 *î* が、4節の節頭語 (*kî*) に現れる。これは、上でも述べた、理由を説明する接続詞 *kj* であり、当然、先行三行からの継続を暗示している。その後、4-6節の各詩行結語の末尾に、

それぞれ長母音 *i* と長母音 *a* が、1 節と同じ位置関係で綴られる。それゆえ、詩編139編は、旧約詩編が含む多くの作品と同様に、まず1-3節で全体の主題を提示し、その関連で、接続詞 *ki* に導入される4-6節が根拠となる事柄を述べていることを確認すべきであろう。これら二つの部分は、音韻論的に区別されながらも、読者に対し連続性を示している。

これは一つの例示にすぎないが、われわれは Auffret による分析の作為性を指摘せずにはおれない。そこでわれわれは、音韻論的な手続きでテキストの区分を進め、それぞれのまとまりがもつメッセージについて考察することとしたい。

3. 文献学的考察

1) 1-3節+4-6節

われわれは容易に、このまとまりにおいて「神」を動作主とする「知る」およびその同義語が鍵語となっていることを読み取れる。このテキストでは、「知る」が動詞 (*jd'*) で3回 (1, 2, 4節)、名詞 (*d't*) が1回の計4回使われている。また1節の「究める」(*hqr*) や2節の「識別する」(*bjn*) は *jd'* と同義的並行法を構成している。3節の「ふるい分ける」(*zrh*) と「洞見する」(*skn*) は、いずれも用例の少ない単語であるが^{s18}、前行で対極表現 (*der polare Ausdruck*) をとり、後行でその総括的な語を配置するパターンは、2節と同じである。この文脈を考慮すると、3節に記された二つの動詞も、全体を掌握すること、すなわち「知る」ことを意味する言い回しと見て差し支えない。ちなみに、やはり目的語に対極表現を配している5節の「杵づける」(*šwr*) と「(手を) 置く」(*šjt*) も同様に性格づけられよう。

ここで考察すべきは、この断片で用いられている完了形への理解である。これにはワウ継続の未完了形 (1, 5節) も含まれる。Th. Booij は、詩文における動詞の時制がしばしば意味上の機能を規定しないまま使用されていると指摘した上で、散文のルールを導入していない限りは状況に応じて訳語を考えるべきことを述べる。そうして、完了形で記された詩編139編1-5節が、現在引き起こされていることを語っていると言う。その主な理由は、1-5節の「究める」や「知る」等が、23-24節では命令形で用いられていることである¹⁹。つまり、詩人にとってそれがいまだ実現していない、あるいはその(確信の) 途上にあるゆえに、命令形が用いられたと解されるからである。言語学者 H. ヴァインリヒはすべての時制形を「説明の時制」(現在と現在完了) と「語りの時制」(過去、過去完了、条件法) に区別したが^{s20}、その用語によるならば、これは「説明の時制」と解される。

では、この「説明」により、いかなる現実が明らかになるのであろうか。われわれは、詩編が連作であるとの観点から、作品の講読を進めてきた。文脈を考慮する際、重要なファクターは、ある語もしくはフレーズの先行作品における使用法である。いまわれわれは「知る」(*jd'*) に着目している。この語は詩編138編6節「……ヤハウエは……驕る者を、遠くから、知っている」で用いられていた。このテキストでわれわれは「遠くから」にも留意すべきである。それは、完全に同じ活用表現ではないが、詩編139編2節でも使われていた²¹。詩編138編でヤハウエが「知る」対象は「驕る者」であり、それは続く138編7節で敵対者に結びついていった。すると旧約詩編の編集者はこの文脈の中で、読者に、ヤハウエが知る「驕る者」とは「私」、

すなわち読者自身であると気づかせようとしていることになる。しかし、本詩編の作者は、この事柄に対して、なお無自覚の状態にとどまっている。

作者は1-5節で神を主語とし、その「全知」を説明した。詩編139編それ自身では、ヤハウェが知るのは「私」以外の何者でもない。ところが、旧約詩編の文脈においては、それはヤハウェの驕れる敵対者としての「私」自身であった。そうして6節では、作者が懐いた神の「知識」への「驚き」に言及する。上で示したように、この節では音韻論のレベルでも先行詩行のスタイルを踏襲しながらも、初めて主語を二人称単数（神）から一人称単数に移行させ（*wkl*）、新しい段落への導入をする。

2) 7-12節

続くまとまりの冒頭三節である7-9節には、明らかな頭韻が観察される。すなわち、各詩行は、接続詞ヴェ（*w*）が先行する場合もあるが、必ずアレフ（*'*）で始められている。動詞はすべて一人称単数の未完了形である。われわれはまずここに一つのまとまりを確認できる。

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| 7. <i>'nh 'lk mrwḥk</i> | <i>w'nh mṣṣjk 'brḥ</i> |
| 8. <i>'m-'sq šmjṣ šm 'th</i> | <i>w'sj'h š'wl hnk</i> |
| 9. <i>'s' knpj-šḥr</i> | <i>'šknh b'hṛjt jm</i> |

続く10節の起句「そこでさえも」（*gm-šm*）は、9節末尾の *jām* と脚韻を構成して、前段との関連性を保持しつつ、韻律による新たな交差配列を提示している。この手法により、神の「導き」（*nhh*）と「捕らえ」（*'ḥz*）が関係づけられる。これは、前段で語られた、神が作者を掌握していることを、いっそう強めるメッセージ効果をもつ。

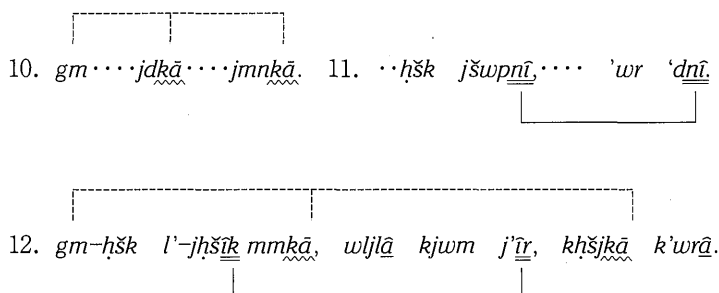
- | | | | | | |
|--|--------------------|---------------|----------------|-------------------|-----------------|
| 9. <i>jām</i> . | 10. <i>gam-šām</i> | <i>jād°kā</i> | <i>tanḥēnī</i> | <i>w°tōḥ°zēnī</i> | <i>j°mīnekā</i> |
| └──────────┘ | | └──────────┘ | | | |
| └──┘ | | | | | |

さらにこの前段の頭韻や脚韻を引き継ぐ構造は、11節にも見られる。われわれの考えるところ、これは前段とのつながりを維持する手法である。動詞の形態は二人称単数の未完了形に移行する。

- | | | | | | | |
|------------------------|------------------------|--|-----------------|---------------|---------------|--------------------|
| 9b. <i>'šknh</i> | 10. <i>wṭḥznī</i> | <i>jmṣk</i> | 11. <i>w'mr</i> | <i>'k-ḥšk</i> | <i>jšwṣnī</i> | <i>b'dnī</i> |
| | | └──────────┘ | | └──────────┘ | | |
| | | └──┘ | | | | |

そして12節においても、10-11節との連関性が観察される。すなわち、10節には、接続詞 *gm* に始まり、各詩行が長母音 *kā* で終わる並行法が記されていた。12節 a も接続詞 *gm* に始まり、

長母音 *kā* で終わっている。しかし12節 c は、詩行末尾には長母音 *ā* が置かれ、その一つ前に長母音 *kā* が記され、若干の変更が加えられている。また11節では並行法の各詩行が、開シラブルの長母音 *ī* で締めくくられ、脚韻を構成していた。長母音 *ī* は、12節 a においては詩行末尾一つ手前のアクセント音節に閉シラブルで、12節 b でも詩行末尾に、やはり閉シラブルで記されている。この結果、12節 b-c は、詩行をまたぐ不規則的な構造ながら、長母音 *ī*, *ā*, *ā* を連ねるまとまりを構成することとなる。そして指摘するまでもなく、11節の鍵語である「闇」(*hšk*) と「光」(*'wr*) は、12節においても同じく重要な役割を果たしている。



以上、述べてきたように、詩編139編の1-9節までは三節ごとに、頭韻や脚韻などによる結束性を示していた。そして、この手法によるまとまりの形式は、種々に応用されて、さらに12節までの三節にも拡張されている。すなわち、10節には交差配列、そして11節には、脚韻によるまとまりが確認された。だが12節の手法は、このテキストまでに見られた頭韻や脚韻とは明らかに異なっている。動詞も三人称単数未完了形に移行している。とはいえ、内容の面で7-9節と10-12節が連続していることは疑いない。そこでわれわれは、この音韻的・文体的な変化から、12節にテキストの区切りを示す移行面が存すると考える。

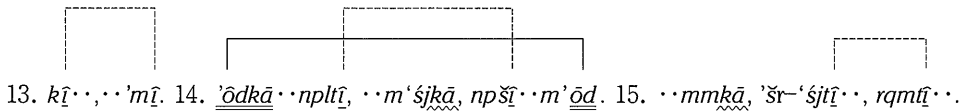
内容の検討に戻りたい。先にわれわれは、旧約詩編の文脈における1-6節が、ヤハウェに敵対する「私」を提示していることを指摘した。すると7-9節がヤハウェからの逃走を語っていることは、たいへん分かりやすいモチーフである。しかもここで言及される「霊」や「天」は、P. Tillich の直観では、神の住まいとしての「天」ではなく、人間の思いこみの産物としてのそれである²²。同様に、作者は11節で、神の力が及ばないと考えた「闇」の中に自身があると述べていることも、その延長線上で理解することができる。だが神の遍在は、その隔てをも越える。

この主題は、先行作品である詩編138編においても言及されていた²³。したがって、この主題は、二つの詩編をつなぐモチーフであるといえる。では続く段落で、この主題はどのように展開されているだろうか。

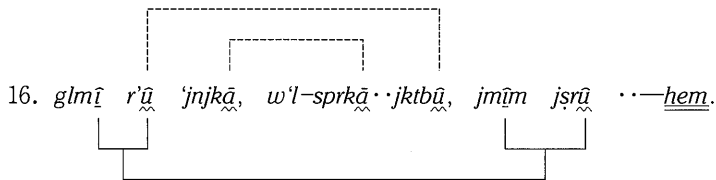
3) 13-18節

われわれはここまで詩編139編を、音韻や交差配列やインクルージオといった文学的な技法により三節ずつに区分してきた。13節は、4節のように、接続詞 *kj* に始まっている。しかし

13節には、4節が1-3節の音韻で役割を果たした長母音 *i* を共有していたのとは異なり、10-12節を特徴づける音韻を継承してはいない。そこでわれわれは12節と13節との間に区切りがあるとする。そして13-15節には次のような音韻論上の連鎖を認めるのである。



この構造では次のことが観察される。まず13節と14節では、各節冒頭と最終の音節が共通している。すなわち、13節冒頭の接続詞 *kj* の長母音 *i* は、節末でも用いられている。同様に、14節では長母音 *ō* が節頭と節末に置かれ (*'ōd*)、インクルージオを形成している。さらに14節には、第1詩行冒頭語尾の人称辞 *kā* が第2詩行末尾に、また13節の鍵となる長母音 *i* が第1詩行の締めくくりと第3詩行の冒頭に用いられ、13節との文体的、音韻的な関連づけが試みられている。15節にこのパターンはないが、第1詩行の締めくくる位置に14節 ab のインクルージオに用いられた人称辞 *kā* が、そして第2詩行と第3詩行の冒頭には、13, 14節でも重要な位置にあった長母音 *i* が記されている。作者はこれらの手法をもって、このまとまりの結束性創出に努めている。指摘したこれらの音韻のいくつかはヤハウエと作者（私）を表す人称辞である。われわれの見るところ、それはヤハウエと作者の関わりが堅固であることを暗示する機能をもつ技法である。16節以下にも同様に音韻論的連鎖を認めることができる。



16節は、15節に記された長母音 *i* を引き継いで書き出され、第1詩行と第2詩行は脚韻（長母音 *ū*）によるインクルージオを構成する。そして第3詩行は、行頭二語末尾の音節に、第1詩行の行頭二語末尾と同じ音節を置いて、別のインクルージオを構成する。続く17節の第1詩行は、明らかに16節第1詩行、17節の第2詩行は16節第3詩行と同じ脚韻を示し（*—ī, —ū, —kā, —hem*）、双方の連続性を強調している。しかしそれらは18節に継承されていない。われわれは、ここにも移行面を読み取ることができる。

さて、13-14節の動詞は二人称単数（神）を主語としていたが、15節では、動作主は先行詩行と変わらない（神）ものの、動詞の形態は受動態で一人称単数（作者）を主語としていた。このような混み入った記述法は16節にも引き継がれている。すなわち、16節第1詩行はヤハウエを動作主とする換喩表現（目）²⁴によりクアル形の三人称複数、同第2, 3詩行は作者に関わる「すべて」や「日々」を主語として、受動表現であるニファル形やブアル形の三人称複数、そして17節では、作者がヤハウエの在り様を三人称複数で描写している。このように、詩

編139編13-18節の段落は、ヤハウエと作者の位置を目まぐるしく入れ替わらせ、双方の一体性を強調している。この「一体性」とは、神の共在（Mitsein）と擁護を意味する。13節で「覆う」と訳した *skk* は「編む」と訳されることが多い²⁵。しかしこのテキストは、神のなす単純作業を指しているのではない。Booij が指摘するように、当該箇所は出エジプト記25章20節やヨブ記40章22節にならい、神による慎重な取り扱いをイメージすべきであろう²⁶。すなわち、作者は、先行段落で語られた神の遍在が、人を監視して、その生殺与奪を掌握するためではなく、神の共在による配慮を示すことを語っている。その前提から、15節 a の「骨」（*'šm*）に関する記述も正確に理解される。やはり Booij が述べるように、旧約詩編においてこの語は、危機に瀕すれば外れて（詩6：3，22：15）主体の生命が脅かされ、危機が去れば、喜び、ヤハウエを讃美する（詩35：10，51：10）ものとして描かれている。それゆえ、「骨」は安定性の象徴といえる²⁷。この名詞にあてられた動詞 *khḏ* の意味は、用例から考えると、ある存在や情報を「悪意のうちに消し去ること」であると思われる²⁸。それゆえ、この箇所は、作者の骨、すなわちその安定性が保全されることを言い表している。また16節で「かたちなき私」と訳した *glmj* も難解な語である。これは旧約中唯一の用例で、他に動詞形が列王記下2章8節に見られるのみである。いま述べた箇所は、預言者エリヤがエリシャに権能継承のしるしとして彼の霊を分け与える場面である。その際、エリヤは自身の外套を「丸める」（*glm*）。Booij によれば、この語はミシュナー・ヘブル語で「未完成の陶器」、つまりかたちのないものを指すとのことである²⁹。エリヤの場面も、外套を無造作に折りたたんだという意味合いであると思われる。それは無価値の象徴である。以上を念頭に、13-18節の段落に、次のような囲い込みの構造を指摘できよう。

- 13. 人知の凌駕
- 14. 「あなたの業」への認識
- 15. 神による安定性への配慮
- 16. 神による無価値なものへの配慮
- 17. 「あなたの考え」への認識
- 18. 人知の凌駕

この構造は、作者にとって神の「全知」が、ただ人知を凌駕するものであるという感想にとどまるのではなく、神による配慮への理解につながるものであったことを物語っている。テキストの上で、第3段落の「全知」は、人知の凌駕という「驚き」のレベルにとどまっていた第1段落におけるそれへの認識を、深化させている。

4) 19-22節+23-24節

ここまで、詩編139編について、音韻論的な観点からテキストの結束性を指摘してきた。そして、1-12節までの明確な頭韻や脚韻は、13節以下ではそれほど明白ではないことを示した。この段落においても、音韻論レベルの関連性は前段の性格を緩やかに継承している。まず気づ

くのは、18節にならった、19-20節の頭韻である。

18. '—……. 19. '—……, w'—……. 20. '—…….

このように各節はアレフ (') で始められている。19節は18節を引き継ぎながら、新しい段落を始め、20節へと書き進めている。20節に見られる頭韻以外の音韻論的な共通性として、冒頭の関係詞 ('šr) 直後の語と、その節の最終語に共通の脚韻 (—kā) を置いて、インクルージオを形成している。21節はこの特徴を引き継ぎ、各詩行冒頭語の脚韻 (—kā) と最終語の頭韻 (') によるインクルージオを、また22節も、各詩行冒頭語と最終語のアクセント音節に長母音 ī を置き、インクルージオを整えている。それゆえ、19節に始まるこの段落は、音韻論的なインクルージオによって共通の形態を示していることになる。

20. 'šr —kā··—kā. 21. —kā··'—, —kā··'—. 22. —līt··—tīm, —bīm··lī.

この段落は、敵対者打倒の祈願を語り、その人々に対する憎悪の念を顕わにしている。われわれは、第1段落の「知る」(jd') が旧約詩編の文脈から、作者自身をヤハウエの敵に組み入れる機能をもつことを指摘した。しかしこの作品を単体で創作した作者に、その自覚はないかに思える。当然のように、神の守りが自身の上にあり、敵対者には報復が臨むと考え、19節以下の言葉を述べている。ここで問題となるのは、この段落の性格づけである。文献批判的に見て、一連の詩行が唐突との感否めない。そのため、上で言及した Briggs は、これを元来独立した詩作と考えた。加えて、19節が、第1詩行を神に、第2詩行を敵対者に向けて語っている展開も、テキストをいっそう難解にしている。いま引用した Briggs によれば、19節第2詩行は編集者による加筆部だという。しかしこれは、われわれがマソラ・テキストに先行する原詩と評した死海写本 (11QPSa)³⁰はもちろんのこと、いかなる写本や古代訳にも典拠はなく、当然のことながら、首肯されえない。Booij は19節第2詩行を、言わば括弧にくくるべき挿入句 (parenthesis) と説明している。彼はいくつかのテキストをあげて、この詩行冒頭の接続詞 w が、内的な訴えを表すと言う³¹。そうであるならば、この詩行は、作者と敵対者の近接を表している。すなわち、この詩編の文脈は詩編139編の作者を敵対者の中に置いた。作者は、その敵対者に向かって、19節 b から20節を述べているのである。そして、20節第1詩行 (三人称複数未完了形) と第2詩行 (三人称単数完了形) 間の時制や人称の不一致は、作者を囲む敵対者の多彩さと、作者がそのところに身を置いた時の長さを描いていると言える。この段落は、敵愾心をむき出しにした、非難されるべき言表を伴う。しかし、テキスト「移行」の側面から考察するならば、敵対者を「殺す」(qtl) よう願った者が (19節 a)、神と「憎しみ」(šn') を共有する程度 (21-22節) のレベルまでクール・ダウンさせたと解することもできる。

そうして、神との意志共有を願った作者は、作品を締めくくる最後の二節で、神に、「究め」(hqr) 「知る」(jd') よう、命令形で懇願する。ここにも文献批判的な観点から、ずれが認め

られる。すなわち、これらの動詞は作品の冒頭で、完了形によって、すでに確信されたものとして、用いられていた。24節の「導く」(nhh)も10節で同様に記されていた。それらが作品の終結部では命令形で、すなわちいまだ実現していないことを示唆する表現で書き置かれている。それゆえ H.J. Kraus は、この段落が時間的には1-18節より前に記されるべきだと述べている³²。独立した作品としてこの詩編を読む場合は、1-3節と23-24節とのインクルージオから、冒頭で告白した神の「全知」が、いっそうの深みをもって自身に臨むようにとの願いを込めて発せられた言葉と解せるかもしれない。しかし先行作品で設定された「神殿の神学」からの脱却という旧約詩編の文脈を読むわれわれは、この食い違いを、自身を善、敵を悪とする図式に生きた者が(19-20節)、神の意志を問う中で(21-22節)自身の罪性に行き当たり、悔改の想いとともに、神との一体感(Mitsein)を求める言辭(23-24節)に至ったと捉えることができる。

4. 詩編139編と旧約詩編の文脈

われわれは、音韻論的な観点から詩編139編の構造を読み込んだ。その結果、この作品は、1-3, 4-6, 7-9, 10-12, 13-15, 16-18, 19-22, 23-24節の八つにに区分され、それぞれ二つのまとまりが一つの段落を形成していることを示した。冒頭の段落(1-6節)は、神の「全知」を覚知した者の驚きを語っている。続く段落は(7-12節)、その驚きを検証する(見方によっては不信ゆえの)逃走に始まり、神の「遍在」の体験に移る。11節の「闇」は作者が身を置く場であり、やはり遍在の体験が綴られている。これは次段落における誕生以前の状況への叙述につながる(13-18節)。この段落でも再び「驚き」に言い及ぶが、ここでの作者はもはや神から逃走する者ではなく、神の配慮を数える者となっている。最終の段落(19-24節)では敵対者批判が口にされる。それは当初、敵の没落による自己保全という様相を呈していたが(19-22節)、やがてむしろ自身を問い直し、神との一体性を感得することへの願いを含意する言表となったのである。以下、詩編139編が属する旧約詩編の文脈がもつ主題との関わりを記し、今後展開される議論の指標としたい。

1) エルサレム中心主義 この詩編には、われわれが「神殿の語彙」と名づけた表象³³は一切用いられていない。旧約詩編の文脈との関連で、われわれは先行作品(詩138編)に神殿における讃美と、神殿に距離を置く場での讃美とを見、そこに「脱神殿」への分水嶺を認めた。詩編139編ではそれが一段と顕在化し、神の「遍在」が強調されていた。神は「天」「陰府」「曙」の起点や、「海の後方」(日没の場)と表された垂直軸と水平軸の極みに至るまで作者に近接している。したがって、旧約詩編の文脈でマアロート歌集以来強調されてきたエルサレム中心主義は、この作品においてある区切りを迎えたといえる。そのため、以降の作品において、讃美や思慕の対象として、シオンやエルサレムに言及されることはない³⁴。

2) 敵対者の問題 作品冒頭の「知る」(jd')が、詩編138編との関わりで、作者をヤハウエに敵対する者の一人に数えさせる。詩編139編では、19節以下で敵対者に言及され、作者は神

による処罰を口にしている。しかし最終的に敵対者攻撃の思いはエスカレートせず、神との一体性への切望に取って代わられる (21-22+23-24節)。詩編140編以降で、敵対者への処罰祈願は140編10-12節のみである。しかしそのテキストも、ヤハウエによる貧しい者 ('nj) と乏しい者 ('bjwn) への守護につながる。したがって、敵対者との闘争感情は弱められている。

3) 応報思想 これは神殿の神学を支える主要な教義であったが、後退している。その象徴的な表象として詩編139編であげられるのは11, 12節の「闇」(hšk, hškh) である。これは、たとえば詩編82編5節では、不正な者 (rš') に味方する者が歩くべき処罰の場である。あるいは、詩編88編13節では、ヤハウエの驚くべき業や義が讃美され得ない、すなわち、神と切り離された場である。しかし詩編139編で、ヤハウエは闇においても人を見つめ、輝きを与える。ここには伝統的な応報思想を突き抜けた地平が提示されている。

このように、詩編139編は、138編のメッセージを継承し、神殿の神学によらないヤハウエ理解を指し示している。われわれはここに、旧約詩編の文脈が進みゆく新たな認識を目撃することができる。この作品は、「究める」「知る」が、完了形から命令形へと形態を変える不規則的なインクルージオを構成していた。それにより、ヤハウエが「知る」ことへの驚き (1-6節)、不信からの検証 (7-12節)、そして誕生へと遡りヤハウエとの一体性を体感することへの願い (13-18節)、敵対者への思いを抑制し、神との一体性への求めへと移行する (19-24節)。ここには作者の精神的彷徨が認められる。あるいは、作者にとってそれが巡礼 (マアロート) だったのではないか。

参照注解書・翻訳

- L. C. Allen, *Psalms 101-150* (WBC 21), 1983.
A. A. Anderson, *The Book of Psalms II. Psalms 73-150* (NCB 11/2), 1983.
F. Baethgen, *Die Psalmen* (HK 2/2), 1897 (1904³).
C. A. & E. G. Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms II* (ICC 16/2), 1907 (1960).
M. Dahood, *Psalms III. 101-150* (AB 17A), 1970.
F. Delitzsch, *Biblischer Kommentar über die Psalmen* (BKAT IV/1), 1894⁵ (1984).
B. Duhm, *Die Psalmen* (KHC 14), 1922².
E. S. Gerstenberger, *Psalms, part 2 and Lamentations* (FOTL 15), 2001.
H. Gunkel, *Die Psalmen* (HK 2/2), 1929⁴ (1986⁶).
E. J. Kissane, *The Book of Psalms*, 1964.
R. Kittel, *Die Psalmen*, 1929.
E. König, *Die Psalmen*, 1927.
H.-J. Kraus, *Psalmen 60-150* (BK 15/2), 1978, 1989⁶.
J. Olshausen, *Die Psalmen* (KHAT 14), 1853.
H. Schmidt, *Die Psalmen* (HAT 1/15), 1934.
K. Seybold, *Die Psalmen* (HAT I/15), 1996.
W. M. L. de Wette, *Commentar über die Psalmen*, 1856⁵.
A. ヴァイザー (大友訳) 『詩篇 (下) 90-150篇』 (ATD 旧約聖書注解14), ATD・NTD 聖書注解刊行会 1987.

- J. L. メイズ (左近訳)『詩編』(現代聖書注解) 日本基督教団出版局 2000.
- C. ストゥールミュラー (飯訳)「詩編」J. L. メイズ編『ハーバー聖書注解』教文館 1996所収
- 勝村弘也『詩篇注解』(リーフ・バイブル・コメンタリーシリーズ) 日本基督教団出版局 1992.
- 関根正雄『詩篇注解(下)』(関根正雄著作集第12巻) 新地書房 1981.
- 関根正雄訳『新訳 旧約聖書 第四巻 諸書』教文館 1995.
- 松田伊作訳『詩篇』(旧約聖書Ⅺ) 岩波書店 1998.
- 石川立「詩編73-150編」木田献一監修『新共同訳旧約聖書略解』日本基督教団出版局 2001所収
- 飯謙「詩編1-72編」木田献一監修『新共同訳旧約聖書略解』日本基督教団出版局 2001所収

注

1. 拙論「神殿に立ち、神殿を築く——詩編138編の文献学的考察」『神戸女学院大学論集』(以下『論集』) 55/2 (2008) 1-13頁
2. 拙著『旧約詩編の文献学的研究』新教出版社 2006年
3. 拙論「マアロト歌集(詩120-134編)と旧約詩編の文脈——序説」『論集』53/2 (2006) 1-17頁, 拙論「ダビデ詩編巻末の歌——詩編145編の文献学的考察」『論集』54/2 (2007) 17-33頁, 拙論「三つの無表題詩編(詩135-137編)——その主題と旧約詩編の文脈」『論集』55/1 (2008) 9-24頁, および注1の拙論。
4. P. Auffret, *La Sagesse a bâti sa maison : études de structures littéraires dans l'Ancien Testament et spécialement dans les psaumes* (OBO 49), 1982, pp.439-531 ; L. D. Crow, *The Songs of Ascents (Psalms 120-134)*, 1996, pp.129 ff.; M. D. Goulder, *The Songs of Ascents and Nehemia*, *JSOT* 75 (1997), pp.43-58 ; K. Seybold, *Die Wallfahrtspsalmen—Studien zur Entstehungsgeschichte von Psalm 120-134*, 1978 ; ders., *Die Redaktion der Wallfahrtspsalmen*, *ZAW* 91 (1979), S.247-268 ; H. Viviers, *The Coherence of the ma^alôt-Psalms (Ps 120-134)*, *ZAW* 106 (1994), S.275-289 ; E. Zenger, *The Composition and Theology of the Fifth Book of Psalms, Psalms 107-145*, *JSOT* 80 (1998), pp.77-102 ; ders., *Die Zion als Ort der Gottesnähe*, in : G. Eberhardt u.a. (Hg.), *Gottesnähe im Alten Testament* (SBB 202), 2004, S.84-114 ; ders., »Es segne dich JHWH vom Zion aus...« (Ps 134, 3) *Die Gottesmetaphorik in den Wallfahrtspsalmen Ps 120-134*, in : M. Witte (Hg.), *Gott und Mensch in Dialog* (FS O. Kaiser, BZAW 345/2) 2005, S.601-621. 他に, R. Press, *Der zeitgeschichtliche Hintergrund der Wallfahrtspsalmen*, *ThZ* 14 (1958), S.401-415 ; E. Beaucamp, *L'unité du recueil des montées. Psaumes 120-134*, *LASFB* 29 (1979), pp.73-90 ; L. C. Allens, *Psalms*, pp.219-221 ; C. ストゥールミュラー, 523頁等。
5. 本論文で参照した詩編139編に関わる研究論文。Auffret, O Dieu, *Connais Mon Coeur : Étude Structurelle du Psaume CXXXIX*, *VT* 48 (1997), pp.1-22 ; Th. Booij, *Psalm CXXXIX : Text, Syntax, Meaning*, *VT* 60/1 (2005), pp.1-19 ; R. B. Coote, *Psalm 139*, in : D. Jobling (ed.), *The Bible and the Politics of Exegesis* (FS N. K. Gottwald), 1991, pp.33-38 ; J. Holman, *The Structure of CXXXIX*, *VT* 21 (1971), pp.298-310 ; J. Holman, *A Semiotic Analysis of Psalm CXXXVIII (LXX)*, *Oudtestament Studiën* 26 (1990), pp.84-100 ; Y. Mozar, *When Aesthetics Is Harnessed to Psychological Characterization >Ars Poetica< in Psalm 139*, *ZAW* 109 (1997), pp.260-271.
6. Briggs, *Psalms*, p.491.
7. Kittel, *Psalmen*, S.418は、14節 c を削除する。
8. Gunkel, *Psalmen*, S.590.
9. われわれの伝統本文に対する姿勢は、注2の拙著35-36頁を見よ。
10. ここに記した四つの主題名は、筆者が、ストゥールミュラー「詩編」527頁を参照して、付したものである。段落区分についていうならば、最近の K. Seybold や E. S. Gerstenberger らも、若干の差異はあるものの、同様の考えを示している。
11. Auffret, O Dieu (注5), および注4の Auffret, *La Saggese*, pp.321-382.
12. M. Girard, *Les Psaumes redécouverts. De la structure au sens*, III (101-150), 1994, pp.434-455.

13. [4 節] Y (補語の拡張部) + x→y || [5 節] y→x + X (動詞の拡張部)。Cf. Auffret, O Dieu, p.7.
14. Auffret, *ibid.*, p.7.
15. 野本真也「創世記第一章第一節に関する一考察」『基督教研究』38/1-2 (1974), 21-39頁, 31頁、および38頁の注45を見よ。その他、Allen, *Psalms*, p.250, n. 2a も、J. Krašovec, Die polare Ausdrucksweise im Psalm 139, *BZ* 18 (1974), S.224-248の S.232f. をあげ、同様の指摘をしている。
16. Vgl., H.Gunkel-J.Begrich, Einleitung in die Psalmen, 1933 (1985⁴), S.42, § 2-18, S.232, § 6-19. Gunkel, *Psalmen*, S.587, は、「類別は容易ではない」と述べてつづ、この作品の類型を「賛歌」としている。
17. 用語の意味内容については、樋口他編『聖書学用語事典』(日本基督教団出版局 2008年)の「音韻論」の項(飯執筆、58頁)を参照せよ。
18. KBL³は、*zrh* を *zrh* II に分類し、唯一の用例とする。de Wette, Delitzsch, Baethgen, Duhm らは、この語の原意を「ふるい分けること」としている。たとえば、de Wette, *Psalmen*, S.612, は、この語が元来は「まき散らす」「ふるい分ける」を意味し、それによって「探求」や「認識」を意味することとなったと説明している。筆者は、この語が、全体を把握している状態を指すと理解し、この訳語をあてた。*skn* は旧約全体で14回、ヒプフィール形では当該箇所その他、民22:30 (2回)とヨブ22:21の3例のみ。
19. Th. Booij, *ibid.* (注5), p.2.
20. H. ヴァインリヒ (脇坂訳)『言語とテキスト』紀伊國屋書店1984年、152頁。合わせて、拙論「旧約詩文テキストの構造分析」『論集』34/1 (1987), 15-36頁, 22-23頁を参照せよ。
21. 詩138:6では *mimmerhāq*, 詩139:2は *mērāhōq*.
22. P. ティリッヒ (加藤訳)『説教集』白水社 (著作集別巻1) 1978年、29頁。
23. 拙論『論集』55/2 (注1) 9 頁以下に記した詩138:6に対するコメントを見よ。
24. 野本真也「比喩としての旧約テキスト」『基督教研究』43/1 (1980), 1-42頁、5 頁参照。
25. 邦訳では、たとえば、フランシスコ会聖書研究所訳や松田伊作訳 (岩波書店) の当該箇所を見よ。
26. Booij, *ibid.*, p.6.
27. *Ibid.*, p.7.
28. 動詞 *khd* の用例は、旧約で32回。そのうち11回がニファル形(出9:15, サム下18:13, ヨブ4:7, 15:28, 22:20, 詩69:6, 139:15, ホセ5:3, ゼカ11:9, 16)。主要な用法として、神が疫病をもって民を「絶やす」(*khd*) こと (出9:15)、あるいは、王に情報をあげないこと (サム下18:13) があげられる。
29. Booij, *ibid.*, p.7.
30. 注2の拙著の6-12頁および273-276頁を参照せよ。
31. Booij, *ibid.*, p.12. 彼はその例として創29:25b, 民20:3, 王下1:10, 4:41a をあげている。
32. Kraus, *Psalmen*, S.1100.
33. 注2の拙著の78頁注7を参照せよ。
34. 詩139編以降のダビデ詩編では一切「シオン」や「エルサレム」に言及されない。この語は、詩146:10, 147:2, 12, 149:2に記されるが、それはヤハウェが愛を注ぐ対象として、あるいはヤハウェに対する讃美の担い手としてである。

(原稿受理 2009年3月24日)